

チベット潜入河口慧海 中国

2007年夏、中国通の友人から秘境の地チベットへ行ってみないかと誘われた。講談社学術文庫河口慧海著の“チベット旅行記”全5巻の壮絶な体験談を読み、写真でみるポタラ宮は何やら神秘めきロマンを掻き立てられていたのでチャンス到来とばかり快諾した。



ポタラ宮とラマ僧

おりしも北京からラサまで寝台列車が開通したので早速予約をした。48時間丸二日の列車の旅である。出発の北京駅で中国らしいちょっとしたトラブルに見舞われた。中国のお偉方が乗車することになったので、グループは分散して乗れというのである。無論断ったが泣く子と地頭には勝てず予約した席は召し上げられてしまった。

明治時代仏教の原典を求めヒマラヤを越え、厳しい鎖国下にあった秘境チベットに潜入した日本人がいる。僧河口慧海で

ある。

河口慧海〈1866年～1945年〉は堺市に生まれた。仏教学者で探検家としても知られている。仏教を正しく伝えるためには中国語からの翻訳ではなく、原典を見なくてはと考えたが、仏教発祥の地インドではすでに失われが、ネパールやチベットにはあることが判り、それを見て研究したいと決心し、日本人として初めてチベットへ潜入したのである。

宣教師から英語を学び、さらに東洋大学の前身である学舎で学び、そして1890年には黄檗宗の寺の住職を務めるなどしながらさらにインドの古語であるサンスクリット語（＝梵語）やチベット語の経典の研究にいそしんだ。

慧海は1897年神戸港からシンガポールを経由してインドのカルカッタに到着した。そしてインド独立に功績のあった日本とも関係深いチャンドラ・ボースに巡り会い、チベット潜入について一方ならぬ世話をかけている。

ダーズリンでチベット語を学ぶ。ネパールのカトマンズに滞在しながらチベットへの道、それも警戒の厳しい関所のある公道を避け間道を探すことに腐心した。現在ではエベレストへの登山基地として知られるポカラを経由する。慧海の選り歩んだ道、それは筆舌に尽くしがたい決死の旅路であった。

1900年遂に悲願のチベットへ入国し1901年ラサに到着する。チベットへもぐりこむ頃には垢にまみれ怪しまれずに密入国できた。身分をシナ人（中国人）と偽り入国し、念願のセラ寺の試験に合格したが、中国人の仲間と一緒にされると身分がばれると思い、セラ寺ではチベット人として通した。

勉学に励みながら様々なことに観察の目を配る。折しも戦争が始まり日本が北京を占領したとの不確かなニュースが飛び交うなどしている。

チベットでの名前は、セラブ・ギヤムツォ（=慧海）と名乗ったが、ラサでは医師として有名となりセライ・アムチー（セラ=医師）と呼ばれた。その関係でダライラマに会う。慧海はダライラマを“法王”と呼んでいる。

当時のチベットは人を殺めても罪を問われないなど法治国家の体を成してなく、最高位のダライラマさえ若くして5人も立て続けに側近に暗殺されている。様々な利害が絡みあい、ダライラマが鋭敏だとそれまで吸ってきた甘い汁が吸えなくなるなどの理由で毒殺されたのである。

慧海は医術を勉強し人に施しそれが評判となり、ダライラマの侍医になるよう勧められるも断る。前大蔵大臣の家族に医療を施したことが縁で懇意になりその家に寄宿しながら様々な情報を耳にする。

チベット社会は政治家、僧侶に始まり誰しも生活の糧を得るための算段をしているが僧侶の中には財産家もいてヤク5千頭を有する人もいるが、最下層の修行僧などは食事のままならない貧しい人たちもいた。当時のチベット人は多夫一妻の風習があり、嫁いできた嫁は兄弟が共有する。また死後の遺体は腹を裂き頭蓋骨など骨は石で砕きハゲワシに食べさせ処理するいわゆる鳥葬など、日本とは異なるチベットの風習奇習を鋭い目で観察し日本に紹介している。

河口慧海は1903年、6年ぶりに帰国した。集めたチベットに関する多くの民族資料や植物標本などは東北大学に寄付され保存されている。貴重な体験は当時新聞に発表されるやセンセーションを巻き起こした。帰国後は僧籍を返上し仏教やチベットに関する研究や経典の翻訳、蔵和辞典の編集など精力的に活動をした。

1913年再びチベットへ行く。1945年脳溢血にて死去する。

2006年に開通した北京ラサ間の青蔵鉄道は、天空列車と呼称され真夏でも雪を頂く峰々を指呼の間に眺め、永久凍土の上を走りながら高度順応していく画期的な列車である。それでも48時間の列車の旅はきつかった。鉄路としては世界一の標高5kmを超えるタングラ駅をカメラに収め、走り出した車窓に目をやれば真白な万年雪を頂く6000mから7000m級の峰々が連なり、その雄大な景観に思わず息をのむ。

秘境チベット高原には野生の動物や高地特有の毛深い牛に似たヤクの群れが時折草を食んでいる。群れを見つけると車内からは一斉に歓声が上がり笑顔がはじける。茫漠として人の住まない厳しい風景を車窓から眺めている分には快適であるが、雪降る極寒のなか徒歩でたった一人、生死をかけた難路を進んだ慧海の気持ちや如何にと感慨に耽る。

48時間の窮屈な列車の旅から解放されラサに到着した。降り立ったラサは道も広く街中もゆっ



ポタラ宮から見たラサ



マニグルマを回すラマ教徒

たりして空気もすがすがしく美味しかった。慧海の訪れた100年前に遡るとラサは汚泥にまみれ道路に溝を掘ってそこに糞尿は垂れ流しでひどい匂いで堪えられなかったというし、かつて住民は風呂に入る習慣もなく洗濯はせず着のみ着のまま垢まみれでまことに不潔であったそうだ。ラサは信仰の街らしく早朝からラマ教信者が、片手にマニグルマを回しながら、また忘我の境地で五体投地をする信者などが行き過ぎる。今までまったく見たこともない現代離れした光景に言葉もなく眺めいった。

新しいホテルや食堂、土産屋が通りに並んでいるがいずれも経営は漢人に占められているようだ。ラサは3700mの高地にあり富士山頂とほぼ同じ標高で四方を山に囲まれている。ポタラ宮はラサの盆地状の中の小山の頂に聳えているので市内のどこからも眺められる。

ポタラ宮の見学は事前に許可がいるし、しかも見学時間は1時間、決められた順路以外の見学は不可、内部の撮影は厳禁と規制が厳しい。

列車で徐々に高度順応してきたためか高山病の症状はでなかったが、ポタラ宮の入口に達する長い坂道をのぼると激しく息切れがした。



入り口には極彩色のラマ教の神々であろうか、恐ろし気な筆致で沢山描かれている。ここから内部は撮影厳禁である。ポタラ宮はおよそ1000部屋もあるとのこと。今は電気がともっているが、かつては灯明の油はバターであったというので

内部はすすけてるように見え、カビだろうか油だろか匂いも籠っている。曼荼羅、ラマ教の大小の仏像、経文の山、宝物、2トンもの金が使われている歴代ダライラマの豪華な棺の数々、さらに覗き見たダライラマの居室は意外に狭く感じるなどあつという間に1時間が過ぎ去った。怨念のこもるようなポタラ宮から外に出ると明るい太陽の光が目眩しく別世界を覗き見てきたような心地がした。

セラ寺(=色拉寺)は艱難辛苦の末、慧海がたどり着いて修行した寺である。意外に小さな寺門を潜ると修行僧たちが住んでいた2階建ての建屋が幾棟も続いているが、今は人の気配がほとんど感じられない。最盛期には1万人もの人々が生活していたというが、現在(2007年)は、



セラ寺の入口の門



修行僧の宿坊

560人の僧がいるだけという寂れようである。ダライラマのいないラマ教の没落であろうか、政治のしからしむところなのか、世の中の趨勢なのか、時代と共に信仰心が薄れて

しまったのかその理由は判らなかった。

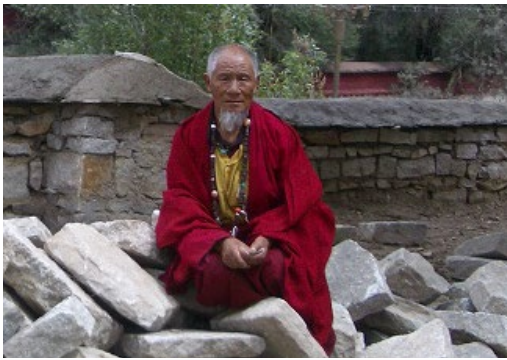


修行僧が禅問答に明け暮れた庭

伝手でこの寺で一番偉い活仏に案内され小さな建屋に導かれた。世界的に有名な砂に書いた極彩色の曼荼羅を特別拝観しながら、きっと慧海も今見ているこの曼荼羅を凝視したに違いないと思うと感慨深いものがあった。寺の大講堂、砂絵の数々、バターでつくった供え物、岩絵の具で描いた鮮やかな仏画、毎年7月に岩山に広げられ公開されている巨大な曼荼羅など諸々を見せてもらった。

活仏曰く河口慧海はかつてセラ寺でNo2の地位にまで駆けあがり仏塔に祀られ今も尊敬されているとのこと。庭に風呂釜のような大鍋がいくつか転がっていた、勢いのあった時代に使用していたが今は不要となったと案内してくれた活仏は寂しく笑った。

修行僧たちが禅問答に明け暮れた庭にも案内された。慧海によれば問答というよりその様はまるで喧嘩をしているように見えたそう。今は人影もなく静まり返っている。寂しい庭の片隅で僧侶が一人瞑想していた。その姿に後ろ髪を引かれながらセラ寺を後にした。



経文を唱え瞑想する僧侶

余談だが講談社学術文庫「チベット旅行記」の校訂をした高山龍三氏とは旧知の間柄である。

集めた情報を分類し、本質を見極めていく“K J法”は経営学でもしばしば活用したツールであるが、K J法の発案者である東京工業大学教授であった川喜田二郎氏と高山氏は共に「鳥葬の国」チベットを訪れ探検している。

両氏とは仕事を通して交流がありしばしば臨場感にあふ

れるチベット探検の話をついたものである。鳥葬と言え

ば先年訪れたインドのムンバイ（元ボンベイ）には、パールスィー人以外は一切立ち入れない「沈黙の塔」という謎めいたエリアがあることを思い出した。ビルの林立するムンバイの市内に鬱蒼とした森がありその中に高い塔がバスの車窓から垣間見えた。この塔は死者の遺体を鳥に食べさせるための鳥葬の塔である。このように古代から連綿と続く宗教上のしきたりを現代に至るも忠実に守るパールスィー人とは、チベット系ではなく遠くイランからインドへやってきた人たちで、インドの大財閥ターターなど優秀な人々を輩出している。